

F

県民読書おすすすめ講座 ～「令和」からみた古典の世界～
(定員130名)

有料講座(1回440円)

改元を機とした古典の学びを通じて、日本の歴史と文化を見つめ直し、古の名作の数々に親しむことを図ります。研究の第一人者である教授陣によりお送りする講座です。

日 時		テーマ	講 師
F1	5/9 (土)	「令和」と『万葉集』 ～『万葉集』巻五「梅花歌」をめぐって～	岩手県立大学名誉教授 佐々木 民 夫 氏
F2	6/13 (土)	万葉人の恋 ～『万葉集』「相聞」の世界～	
F3	7/18 (土)	『源氏物語』の光と影① ～光源氏と女君たちの幸不幸そして祈り～	秋田大学・秋田県立大学名誉教授 佐々木 久 春 氏
F4	8/29 (土)	『源氏物語』の光と影② ～『源氏物語絵巻』にみる平安の生活～	
F5	10/31 (土)	『平家物語』を読む ～歴史と文学の間①～	秋田大学教育文化学部 教授 志 立 正 知 氏
F6	11/28 (土)	『平家物語』を読む ～歴史と文学の間②～	

講師：秋田大学名誉教授・秋田県立大学名誉教授 佐々木 久春 氏

F3 7月18日(土)『源氏物語』の光と影① ～光源氏と女君達の幸不幸そして祈り～

講師の佐々木氏は、長編に及ぶ同作のハイライトたる部分を1回目の講座で扱うことで、本作の魅力と醍醐味が、既読であれ未読であれどちらの受講者にも伝わるよう、講座を展開されました。「光と影」と銘打たれた演題ですが、光源氏の名の理由、数多の恋愛関係の中でも紫の上・藤壺・葵の上といった女君達との関係性が、「光」に象徴される部分であり、年齢を経た光源氏にもたらされた幽暗や彼との関係の中で女君達が抱いた葛藤・憂いが「影」の部分として描かれていることが紹介されました。既読歴のある受講者にとっても新たな発見となったようです。

F4 8月29日(土)『源氏物語』の光と影② ～『源氏物語絵巻』にみる平安の生活～

11世紀初頭に著された『源氏物語』ですが、約150年後にその世界観を絵と詞書(ことばがき)で表現した作品が、今回の題材となった『源氏物語絵巻』です。講師の佐々木氏は今回、数々の作品場面の中から、前回の講座で取り上げたハイライト場面が絵画化された箇所スポットを当て講座を展開されました。さらに、副題にもあるとおり、平安貴族の生活の様子についても目を向けられました。作品及び本絵巻にふれることで、生活習慣・儀式や風習・美意識・遊び・恋愛など、様々な当時の貴族文化を知ることができることと話されました。

講師：秋田大学教育文化学部 教授 志立 正知 氏

F5 10月31日(土)『平家物語』を読む ～歴史と文学の間①～

軍記物といわれる同作ですが実際は政変場面が多くが割かれていること、諸本が存在し「語り本系」と「読み本系」に分かれることなど、冒頭から意外な『平家物語』の姿が次々と紹介されました。そして、講座は、「驕れる平氏の最初の悪行」として位置づけられる「殿下乗合事件」を中心に展開されました。事件の主犯は平重盛である・なしをはじめ、同物語と他の歴史書には事実をめぐり数々の相違点があることが学術的見地をふまえて指摘されました。こうした歴史と文学の間に位置する同物語を読むにあたり、志立氏からは、「"物語"として味わうべき」との貴重な視座が示されました。

F6 11月28日(土)『平家物語』を読む ～歴史と文学の間②～

今回は、「源平の戦い」を主とした講座でありました。戦の進展に合わせて志立氏からは随所に解説が加えられ、その度に一般的に抱かれがちな同物語のイメージは覆されていきました。具体的には、同作において源平合戦の記述は実は多くないこと、清盛の熱病はマラリアの疑いがあること、倶利伽羅峠での「火牛の計」は中国の逸話であることなど。中でも、『平家物語』の成立は平氏一門の怨霊化を防ぎ鎮魂を願ったのことという御教示は、同作を読むにあたり不可欠なものでした。

講師：岩手県立大学名誉教授 佐々木 民夫 氏

F1 12月19日(土)「令和」と『万葉集』～『万葉集』巻五「梅花歌」をめぐって～

「梅花歌」とは、梅の花を歌った和歌を指し、万葉集中32首を数えます。「令和」の文字は、迎えた穏やかで素晴らしい春を讃え、皆で梅の花の歌を作ることと呼びかける序文中に記されていることが第一に紹介されました。続けて、梅は伝来種のため珍重され、ステータスの証でもある特別な花であったことが講師の佐々木氏から語られました。こうした解説を通して、新元号に込められた希望の意味と素晴らしさについてが明示されました。このほか、万葉仮名の用いられ方や歌詠みの技術などが多岐にわたり紹介されましたが、佐々木氏の「歌の意を知ることによって古代と現代を行き来できる」というメッセージが、受講者の皆さんの心を強く打ちました。

F2 12月19日(土)「万葉人の恋 ～『万葉集』「相聞」の世界～

今回のキーワード「相聞(そうもん)」とは、「あいぎこえ」ともいい、お互いにやりとりすることを意味し、万葉集ではこのやりとりの多くが男女間での思慕・恋情を歌っているため「相聞=恋歌」となったそうです。さらに、相聞は、万葉集のみにある特別な分類であることを佐々木氏は言及しました。次に、相聞における「～に恋ふ」についての解説がなされ、目の前にいない相手を求める心象であることなど、日本語ならではの繊細な表現法についても論じられました。また、恋を「孤悲」と書く切なさについてもふれられました。質疑応答では、受講者からの質問を機に、発音による万葉仮名の書き分けについてや、大伴家持の晩年の行方について話が及ぶなど、有意義な学びが展開されました。